厚木市史たより　第31号
令和6年（2024）9月30日
題字は渡辺崋山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

「相州星降梅」を刻む　本阿弥光悦像

厚木市史編集専門委員会委員　山田 不二郎

はじめに

本阿弥光悦は桃山時代から江戸時代初期に活動した能書家・工芸家である。永禄元年（一五五八）、刀剣の鑑定、研ぎ、拭いを家業とする京都の本阿弥家に生まれた。光悦は家業のほか、書・陶芸・蒔絵など様ざまな分野の創作に取り組み、舟橋蒔絵硯箱（国宝）など多くのすぐれた作品を生み出した。元和元年（一六一五）、光悦は徳川家康から洛北鷹峯（京都市北区）の地を拝領し、ここに一族や多くの工匠を集めて芸術村を作り、創作活動を続けた。寛永十四年（一六三七）、八十歳で死去。

令和六年一月から三月の約二か月、東京国立博物館で特別展「本阿弥光悦の大宇宙」が開催され、筆者も鑑覧の機会を得た。展示の導入部は光悦の人物像を知る作品群で、その第一は「本阿弥光悦坐像」であった。江戸時代、十七世紀のもので、光悦の孫である本阿弥光甫作と伝えられる。図録によると、像高二二・五センチ、横幅二二センチの小さい木坐像であるが、光悦を直接知る孫の手による作品として貴重な彫像であると評されている。ここで筆者の目を釘付けにしたのは傍らの坐像裏面に刻まれる銘の写真（図1）であった。そこには「以相州星降梅造之光悦像」と刻まれているのである。「相州星降梅」は本市依知地区の日蓮宗寺院に伝わる奇瑞伝承に由来するものと考えられる。この梅樹で作ったという彫像が存在するということ自体、非常に驚くことであったが、同時に、光悦・本阿弥家と市域の日蓮宗寺院に、何か縁（ゆかり）があったのであろうかと疑問が湧いてきたのである。

図1　本阿弥光悦坐像と像裏面の銘
『特別展本阿弥光悦の大宇宙』より引用

一　日蓮の相州依知逗留と星下りの奇瑞

日蓮の依知逗留　日蓮宗（法華宗）の開祖日蓮は承久四年（一二二二）安房国に生まれた。同国の清澄寺（千葉県鴨川市）で天台宗を学んだのち、鎌倉・比叡山など各地で修行を重ねた。仏教の根本が法華経にあると悟った日蓮は建長五年（一二五三）清澄寺に戻り、「南無妙法蓮華経」の題目を主唱し布教活動を開始した。日蓮は念仏宗・禅宗など他宗を邪教として厳しく批判し、前執権北条時頼に「立正安国論」を呈上して法華経信仰の必要性を説いた。幕府からはこれを忌避され、伊豆配流などの弾圧を受けたが、日蓮はこれに屈せず布教活動を続けた。文永八年（一二七一）九月十二日、他宗批判により訴えられた日蓮は幕府に捕えられ、龍口（藤沢市）で処刑されそうになったが、これを免れて佐渡流刑となり、佐渡国守護大仏宣時の預かりとなった。そして翌十三日、鎌倉から同国守護代本間重連の館のある相模国依智郷に送られ、佐渡に向け出立する十月十日までの約一か月、ここに逗留した。

星下りの奇瑞　星下りの奇瑞は本間館に到着した十三日夜の出来事と言われている。日蓮が支援者の一人四条金吾（頼基）に送った九月二十一日付書状（『厚木市史』中世資料編文献198）に、「三光天子の中に、月天子は光物とあらはれ、龍口の頸をたすけ、明星天子は四五日已前に下て、日蓮に見参し給ふ」と、二度の奇跡があったという記述がある。三光天子は日天子・月天子・明星天子の総称である。それぞれ太陽・月・星の尊称で、法華経を守護する神と考えられている。一度目は龍口の法難の際、満月のような「大なる光物」が現れたという出来事で、二度目が四、五日前に明星天子が下り立ったという出来事である。日蓮の伝記絵巻『日蓮聖人註画讃』によると、依知本間館に到着した十三日夜、日蓮は月に向って法楽を行ったあと、今の状況に奇瑞を現すべき月天子が何の兆候もなく、快く澄み渡っていると月天子を責め立てた。すると明星天子と衆星が下り、庭上の梅枝に懸かって光を放つと童子が現れた。童子は日蓮に向い立ち、「我は明星なり」と名乗り、日蓮と語り話した（図2）。警護の兵士は縁より飛び降りて庭に伏し、或いは逃げ隠れた。兵士の多くが離れ去ると俄かに天曇って大風が吹き、江の島の空は太鼓を打つごとく鳴動した。翌日、日蓮には佐渡流刑が下されたという。この奇瑞伝承は厚木市金田の妙純寺、中依知の蓮生寺、上依知の妙傳寺の日蓮宗三か寺に伝えられている。

図２　歌川国芳画「高祖御一代略図　九月十三日夜　依智星降」（個人蔵）

妙純寺　明星山と号する。近世には高座郡ほかに末寺五か寺があり、無本寺であった。『新編相模国風土記稿』によれば、建治二年（一二七六）日善が開基した寺で、文永八年の日蓮寓宿と星下り奇瑞の旧跡としている。また、文永十一年に本間氏館を廃して寺となし、日蓮を開基、日善を二祖とした伝承があるとも記している。「妙純寺星下略縁起」（天保十一年〈一八四〇〉、『厚木市史』近世資料編(1)210）には、元弘元年（一三三一）本間重連の遺命により、一族が星下梅樹の傍らに日朗作の三光天子尊像を安置し、旧宅を妙純寺として開創した。日善を招請して開山供養を行い、日蓮を開祖としたと記されている。日朗は日蓮の高弟六老僧の一人で朗門流の祖、日朗門下九老僧の一人が日善である。境内には本間重連の供養塔と伝える宝塔一基がある。当寺の北に位置する臨済宗建徳寺（厚木市金田）は、重連が先祖供養のため創建したという伝承があり、境内には本間氏累代の墓と伝える宝篋印塔・五輪塔二八基が現存する。

蓮生寺　宝塔山と号し、下総国中山法華経寺（千葉県市川市）末である。『新編相模国風土記稿』によれば、日蓮を開山、蓮生房日永（俗名本間重連）を開基とし、日源を中興開山とする。日源は日蓮の直弟子で、六老僧に準ずる中老僧の一人である。「蓮生寺縁起」（年不詳、近世資料編(1)238）に記される当寺創建の由緒は、日蓮は文永八年の依知逗留の時、自ら石を積んで両親供養のための宝塔を造った。三年後、刑を許され帰還した日蓮は当地を訪れ、宝塔に参拝した。これに感銘した本間重連の願いにより、屋敷の提供を受け、重連作の天拝祖師像を本尊にまつり宝塔山蓮生寺を開山した。また、近くにあった三光山梅香寺を日蓮開山・星下り奇瑞の旧跡と記し、洪水で損壊した梅香寺を併せて一寺を成したとして、宝殿には梅樹の古木を安置するとしている。

妙傳寺　星梅山星降院と号し、中山法華経寺末である。「妙傳寺略縁起」（寛延元年〈一七四八〉、近世資料編(1)256）には星下り奇瑞と当寺の開創由緒が記されている。それによると文永十一年、日蓮は佐渡から帰還した折に本間重連から寺地として屋敷を献上され、星降院と名付けた。弘安元年（一二七八）、日蓮の命により中老僧日源が星降院を星梅山妙傳寺と改め、日蓮を開山、日源を二祖として開創した。当寺は二十世から三、四代の間、不受不施義を巡る宗内の対立によって衆僧・檀家・寺地・末寺が離散して廃寺に瀕する状況になった。寛文五年（一六六五）、常陸国隠井（加倉井）妙徳寺（茨城県水戸市）から日遥上人（元禄九年〈一六九六〉没）が二十三世として入山し、再興を図ったという。

二　光悦と法華信仰

本阿弥家と法華信仰　本阿弥家は京都の日蓮宗本法寺の檀徒である。本法寺は永享八年（一四三六）日親上人が開山し、本阿弥家六代本光を開基とする。当寺は幾度かの移転を経て、天正十五年（一五八七）日通上人の時に現在地で再興した。このとき私財を投じて堂宇整備に尽力したのが、本阿弥光二・光悦親子をはじめとする本阿弥一門であった。また、一門の内には京都の本山寺院の歴世に名を連ねる者がいる。光悦の孫日允は本法寺十八世、甥日饒は妙顕寺十五世、日饒の子日意は頂妙寺十三世貫主を務めている。光悦もまた熱心な法華信仰があり、「立正安国論」など日蓮聖典の筆写、檀那寺本法寺をはじめ中山法華経寺・池上本門寺（東京都大田区）・京都鷹峯檀林など日蓮宗寺院の堂宇扁額の揮毫には、光悦の信仰心が明確に現れている（『特別展本阿弥光悦の大宇宙』）。

中山法華経寺と本阿弥家　中山法華経寺は正中山と号し、文応元年（一二六〇）の日常開創を伝える。当寺は日蓮自筆の文書を数多く蔵し、寛永末寺帳で一三三寺を書上げる中山門流本山である。慶長二年（一五九七）からは京都の本法寺と頂妙寺、堺妙国寺（大阪府堺市）の輪番住持制となった。当寺には光悦と本阿弥家一門の分骨墓が所在し（図３）、関東における本阿弥家菩提寺であった。檀那寺本法寺が輪番で当寺貫主を務めており、本阿弥家との密接な関係が認められる。元和八年（一六二二）には本阿弥家十代光室が両親供養のため五重塔建立を発願し、加賀藩二代藩主前田利光（のち利常）の援助を受けて寄進した。正保三年（一六四六）には光悦の孫光甫が、当寺が所蔵する日蓮直筆の「立正安国論」を補修している。また、光甫の弟本法寺日允は当寺三十五世貫主を務め、続いて、日允のまたいとこ頂妙寺日意が三十六世として入山している。光悦は寛永二年（一六二五）、十代光室が江戸で急死したため急

図３　本阿弥光悦分骨墓
千葉県市川市 中山法華経寺

ぎ下向した。徳川秀忠に謁見して宗家存続を許されたのち、法華経寺を参詣した。光悦が当寺堂宇の扁額を揮毫したのは二年後の寛永四年である。

三　不受不施義を巡る争論

不受不施問題　「妙傳寺略縁起」は、妙傳寺が不受不施の問題で廃寺に瀕する状況になったと記している。不受不施とは、法華経の教えを信じない者から施しを受けてはならず、また施しをしてはならないとする日蓮宗の宗義である。この不受不施義を巡り、近世の日蓮宗では宗内を受派・不受派に二分する大きな争論がおこり、抗争が続いた。ことの発端は、文禄四年（一五九五）に豊臣秀吉が方広寺大仏殿建立を供養する千僧会を催し、各宗に出仕を求めたことであった。法華信者ではない秀吉の招請に対し日蓮宗内では、国家権力を重視して国主は除外とする京都本満寺日重の主張に、長年政治・文化の中心にある京都の本山寺院の多くが同調したが、妙覚寺日奥は宗義の厳格護持を主張して出仕を拒んだ。秀吉の死後、京都十六本山は日奥を公命違背の罪で訴え、慶長四年（一五九九）、徳川家康は受派の妙顕寺日紹・妙国寺日統と不受派日奥を大坂城で対論させた。結果、日奥の主張は国家権力を軽視する邪義と断じられ、日奥は対馬配流に処せられた。日奥の帰還後、両派は和解し沈静化していたが、寛永三年（一六二六）将軍秀忠の室崇源院の葬儀参列を機に、関西寺院及び関西出身僧を貫主に据える身延山久遠寺（山梨県身延町）を中心とする受派と、開幕して間もない江戸及び日蓮の聖地房総地域に勢力のある不受派寺院との間で対立が再燃し、同七年、江戸城における身池対論に発展した。受派は久遠寺二十六世日暹を筆頭に久遠寺前住日乾・日遠ら六人、不受派は池上本門寺十六世日樹を筆頭に中山法華経寺隠居日賢ら六人が列座して行われ、結果、不受派は敗者と裁決された。不受派六人は流刑となり、拠点妙覚寺は日乾に、本門寺は日遠に与えられた。その後、平賀本土寺（千葉県松戸市）・小湊誕生寺（同鴨川市）・碑文谷法華寺（東京都目黒区）などを拠点として不受不施義護持の活動が続いたが、寛文九年（一六六九）幕府は不受不施寺院の寺請を禁止した。これは事実上、不受不施派を禁制とするものであり、宗義に厳格な僧は明治時代に至るまで地下に潜伏して不受不施義を護持したのであった。

中山法華経寺末妙傳寺・蓮生寺　法華経寺は受派勢力の強い関西地域の三か寺が輪番貫主を務めていた。しかし、元和から寛永初期の貫主日賢（除歴）・二十世日忠は不受を主張して受派の頂点に立つ久遠寺に対抗するなど、法華経寺は関東における不受派の拠点であった。身池対論敗北後、法華経寺には受派の貫主が送られ、加えて法華経寺の有力塔頭である四院家が輪番制破棄を目論んだこともあり、寺僧・信徒・末寺の多くが違背して寺内・寺外は混乱した。妙傳寺・蓮生寺はこの中山法華経寺の末寺である。妙傳寺が不受不施問題で衰微していたのは元和二年（一六一六）没の二十世日沾、寛永十九年（一六四二）没の二十一世日応、明暦三年（一六五七）没の二十二世日性のころであり、まさに法華経寺門流内が混乱していた時期であった。

久遠寺触下の妙純寺　天明七年（一七八七）作成の寺院本末帳において、妙純寺は久遠寺派内に整理され、「身延久遠寺触下支配」の「一本寺」として書上げられている。「触下」は触頭寺院の管轄下にある意味である。近世の寺院統制の柱である本末制度が僧の法系・師弟関係に基づいて、本寺―末寺の従属関係を網羅的に整備しているのに対し、触頭は寺社奉行の下に置かれ、幕府の命令を本山や触下にある寺院に伝達し、訴訟や願書等を幕府に上申する行政機関的な役割を担った。厚木市下古沢の日蓮宗本照寺に「久遠寺支配触下本寺附」と題した文書が蔵されている（図4）。奥書によると享保十一年（一七二六）、京都妙顕寺の触渡し違背に係り、久遠寺触下の本寺格寺院についての説明書として奉行所へ提出された文書の控えである。この中に「相州依知 妙純寺」の名がある。久遠寺が住持僧を任命するもので、妙純寺のほか九か寺が同じ扱いとなっている。後段には「慶長四年已来度々御制禁之邪宗発起仕候ニ付久遠寺日乾、日遠、日暹、日奠、日脱ニ邪正糺明被仰付候故、邪宗度々対破仕候節、其本寺共を久遠寺江被下置候寺ニ而御座候、然共元一本寺故末寺ニ而ハ無御座候」と付記がある。慶長四年の大坂対論以降、久遠寺日乾らにより不受不施派の制圧がたびたび行われ、これにより不受派の本寺は久遠寺触下に置かれたが、元は独立した本寺（一本寺）であり、久遠寺の末寺ではないという説明である。妙純寺あるいはその末寺を含めた中に不受不施義を主張する活動があり、制圧の結果、妙純寺は久遠寺触下に置かれ、かつ久遠寺に住持任免権を掌握されたのであった。また、『禁制不受不施派の研究』に寛文五年（一六六五）の「差上申一札之事」（久遠寺文書）が引用されている。これは同年の領知承認に伴う朱印状発給に際し、小湊誕生寺など六か寺が連署して寺社奉行に提出した「慈悲供養として朱印（寺領）を受ける」旨の証文で、妙純寺がこの連署に加わっている。国主除外の供養を認めない不受派はこれまで受派に対し、寺領は国主の

図4　久遠寺支配触下本寺附
下古沢 本照寺蔵

仁恩によって下賜されたものと主張してきたが、この改めで幕府は、供養として寺領を受ける証文の提出を命じたのであった。六か寺は慈悲として領地を受けることで、表向き幕府の命に従う形を取ったと説かれる。妙純寺は不受不施派の中で悲田派と呼ばれた立場で行動していたと思われる。

光悦と不受不施問題　光悦が活動した時期は不受不施問題で日蓮宗が二分していた時期である。従って、光悦と親交のある寺・僧は受派・不受派双方にわたっていた。光悦が再興に尽力した檀那寺本法寺の十世日通は、方広寺供養会出仕の談義では受派の立場を取った。光悦の養嗣子光瑳（こうさ）の発願で元和二年（一六一六）に鷹峯に開創した「法華の談所」には久遠寺前住日乾が招かれ、常照寺と号した。寛永四年（一六二七）には光悦・本阿弥家の支援によりここに鷹峯檀林（学問所）が開設し、初代化主（けしゅ）（学頭）に本満寺日暹が招請された。日暹は翌年、久遠寺二十六世となる。日乾・日暹とも受派の頂点に立つ久遠寺貫主として不受派制圧に取り組んだ僧である。一方で、光悦は不受派の拠点であった中山法華経寺と深い縁故があった。同じく不受派拠点の池上本門寺では、法華経寺と同じ寛永四年に堂宇扁額を揮毫しており、これに貫主日樹が銘文を寄せている。ここでも光悦と不受派代表の交流が認められる。本門寺は日樹住持の時に火災で堂宇を焼失し、この再建に資金を援助したのが日樹に帰依した加賀前田家の寿福院である。二代藩主利光の生母寿福院は熱心な法華信者で、北陸の拠点寺院である能登国滝谷妙成寺（石川県羽咋市）を菩提所と定めて諸堂を整備し、中興の祖とされる。寿福院は受派寺院に対しても、久遠寺に五重塔・奥院祖師堂などを寄進し、京都妙顕寺では本堂・五重塔を寄進している。寿福院の諸寺院への堂宇寄進は、受派と不受派の融和を意図したものという説もある（「寿福院ちよと自昌院満姫の人脈と功績」）。妙顕寺再建本堂の扁額揮毫は寿福院から光悦に依頼され、光悦は早々にこれを仕上げている（『特別展本阿弥光悦の大宇宙』）。前田家からは父光二の時から二百石の知行を与えられ、刀剣の御用を務める関係があった。

おわりに

江戸時代初期の代表的芸術家、本阿弥光悦の像に何故「相州星降梅」と刻されたのであろうか。星下り梅であるかどうかの真偽は確かめようもないが、依知の日蓮宗三か寺と接点があったのであろうか。

龍口の法難から依知星下りの奇瑞は、諸天に守護される日蓮を象徴する出来事として、後世まで縁起本や木版画が刊行されるなど教義の普及、宗勢拡大に有用な伝承であったと思われる。熱心な法華信者である光悦・本阿弥家がこの伝承と結びついたことは考え得るが、しかし、これだけではどうも説得力に欠ける。両者の接点となるのが中山法華経寺である。光悦・本阿弥家は同寺を関東の菩提寺として強いつながりを持っていた。実際、光悦と像製作者の光甫は同寺で揮毫・修復を行っており、直接に関わっている。さらに、ここに不受不施問題を加えると具体性が増してくる。日蓮宗の有力な支援者であった光悦・本阿弥家は、京・大坂のみならず多方面に豊富な人脈を有していた。光悦が活動した時期は不受不施問題で宗内が二分していた時期であったが、光悦の人的交流は受派・不受派を超えたところにあった。法華経寺末寺である妙傳寺・蓮生寺はこの問題の渦中にあったと思われ、ここに両者の接点が生じたことは考え得ることである。また、妙純寺は「不受不施再興之張本人」（『禁制不受不施派の研究』）と名指しされた小湊誕生寺などと行動を共にし、久遠寺に住持任免権を掌握されるなどの統制を受けるほど、有力な不受派寺院であったと言える。妙純寺は不受派を牽引する立場にあり、他の不受派寺院・僧に加えて、有力な法華経支援者との交流がある中で、光悦・本阿弥家との接点が生じたことも考え得ることである。

このように見ると、光悦と依知三か寺は存外近接した位置にあったように思われてくるのである。しかしながら、不受不施問題における三か寺の詳細はわかっていない。また、両者の間に介在したような人物についても情報を得られておらず、小稿が何らかの答えを導き出せたものではない。本阿弥光悦坐像の裏面にある「相州星降梅」の銘は、以上述べてきたような時代的・社会的背景の中で刻されたものと理解しておくことにとどめておきたい。

謝辞　本阿弥光悦坐像の図版掲載について御配慮いただいた所蔵者及び東京国立博物館に感謝申し上げます。

〈主な参考文献〉
東京国立博物館『特別展本阿弥光悦の大宇宙』二〇二四年
宮崎英修『禁制不受不施派の研究』平樂寺書店 一九五九年
日暮聖ほか訳注『本阿弥行状記』平凡社 二〇一一年
中山法華経寺誌編纂委員会編『中山法華経寺誌』一九八一年
石川修道「寿福院ちよと自昌院満姫の人脈と功績」『現代宗教研究 第四三号』日蓮宗現代宗教研究所編 二〇〇九年
『厚木市史』中世資料編 一九八九年
『厚木市史』中世通史編 一九九九年
『厚木市史』近世資料編(1)社寺 一九八六年
『厚木市史』近世資料編(4)村落2 二〇〇七年

文化財一般公開・星下りの伝説を訪ねて・

本稿で取り上げた依知地区にある妙傳寺、蓮生寺、妙純寺を一般公開します。

日時　令和六年十月十九日（土）・二十日（日）

時間　午前十時から午後三時まで

※詳しくは、市ホームページをご覧ください。

厚木市史だより　第31号
令和六年（二〇二四）九月三十日発行
編　集　厚木市文化魅力創造課
発　行　厚木市
住　所　神奈川県厚木市中町三―一七―一七
電　話　〇四六・二二五・二〇六〇
FAX　〇四六・二二三・〇〇四四
「厚木市史だより」は厚木市ホームページにも掲載しております。